

家事科・家庭科における間食に関する教育の変遷

—ジェンダーの視点から—

表 真 美

(教育学科教授)

1. はじめに

(1) 子育てと食生活

ベネッセによる子育て生活基本調査の経時変化をみると、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と回答する割合が、1997年から2008年の11年間で20%近く減少し、自分を犠牲にして子育てを優先しようとする傾向が高まっている（ベネッセ2008）。2009年に京都市の幼稚園・保育所に依頼して行われた質問紙調査の母親の回答のみをとりだした結果では、子どもに手作り料理を食べさせることが「よくある」と答えた母親は実に95%に達した（表2009）。子どもには手作りの料理を食べさせるべきだ、あるいは食べさせたいとの母親の思いが、結果に反映されているのではないだろうか。子育て不安に関する最近の調査では、一人の母親が抱える不安の数、不安とを感じる母親の割合も多く項目で減少していたが、「離乳食」は有意に増加していた（原田ほか2011）。大日向雅美は、離乳食について、多くの頑張りすぎる母親は完璧に出来ないと傷ついてしまうので、細かい栄養の指導よりも勇気づけることが大切と述べる（大日向2009）。

家庭における食事のしたくの家事分担は、1992年、2002年、2004年の調査で、約90%を妻が担当しており、いずれの年齢階級でも妻が8割を下回ることはない（内閣府2004）。生活時間調査では、一日平均の食事の管理時間は、妻は1時間32分、夫は9分と大きな偏りがある（総務省2006）。1975年に「わたし作る人、ボク食べる人」というセリフをともなったCMが批判され、社会問題となった。しかし、35年後

の現在、食品のテレビコマーシャルからは「ママの作ったごはんは世界一」との歌が流されている。いまだ子育てには愛情を込めた「母親」の手作りごはんが必要といった風潮が社会全体に根強く浸透している。

家庭の食生活に影響を及ぼす要因について整理したのが図1である。学校内外において、教科書や副読本を用いて食育が行われている。また、新聞、雑誌、テレビにおいても食に関する内容が盛んに報道され、インターネットも含め、多種多様・大量の食情報が家族の食行動に影響する。一方、家族員の生活時間、台所、食堂や食卓などの食空間、調理器具や家電製品などの食にかかわる道具は、調理や食事のとり方など家族の食生活の経営に直接作用する。中食・外食を提供する食品産業も含めて、産業構造や経済階級と深く結びついたこれらの構造的要因が家族の食に大きな影響を及ぼす。また、食生活を支える家族員の家事労働は不可欠であることは言うまでもない。これまで家族の食を支えて

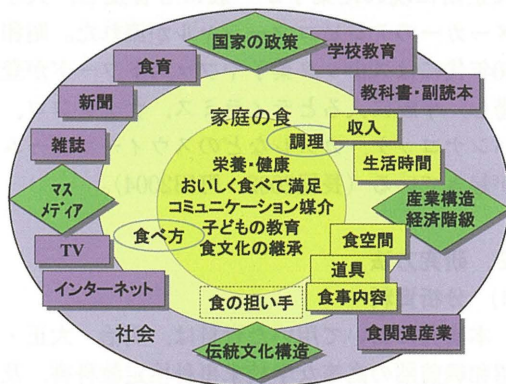


図1 家庭の食に影響を及ぼす要因

きた女性の雇用労働化、それにともなう食品産業の増大など、家族の食を取り巻く環境は大きく変化しているにもかかわらず、食の担い手は大きく女性に偏っている。大量の食情報が発信される中で、子どもの食は手作りすべきとの意識が母親を追い詰めていないだろうか。

そこで本研究では、家庭科教育において、幼児食の一つである間食・おやつ・菓子がどのように位置づけられ、教えられてきたのかを明らかにし、今後の教育の方向性を探ることを目的とする。

(2) 家族の食生活における間食・おやつ・菓子

間食・おやつ・菓子の意味を機能面から整理すると、3食では不足する栄養を補う生理的機能、おいしい菓子を食べて満足する心理的機能、楽しく会話をしながら茶などとともに菓子を食することにより、コミュニケーションの媒介となる社会・教育的機能、和菓子・伝統菓子などの食文化の創造と継承を行う文化的機能の4つがあげられる。

八つ刻に食べた間食が「おやつ」の語源であることはよく知られている(藪2002)。子どもに「お八つ」を与える習慣が一般化したのは大正期であり、カステラやビスケット、あられ、昭和にかけてキャラメル、チョコレートなどの市販の菓子があらわれる(小菅2004)。しかし、これらを食することが出来たのは社会階級の高い家庭の子どもであり、労働者家庭の子どもは駄菓子屋での「買い食い」が常であった(青木2004, 林2004)。戦後の高度経済成長期には、大正期に現れた菓子が一般にも普及し、大手メーカーのテレビコマーシャルが流れた。昭和40年代にはスナック菓子やファストフードが登場し、平成に入るとティラミス、ナタデココ、パンナコッタ、カヌレなどのスイーツブームが起きている(長尾2002, 町田2004)。

2. 研究方法

(1) 分析資料

本研究において用いた資料は、明治・大正・昭和戦前期の高等女学校家事科検定教科書、及び中学校・高等学校家庭科教科書である。

高等女学校家事科検定教科書、検定が始まる明治30年代初頭から敗戦まで一貫して発行されており、「保育」の内容を含むため、戦前の家族の食生活における間食・おやつ・菓子の位置づけの変遷を知るためには、もっとも適した資料と言える。横山悦生作成「戦前における家庭科検定教科書一覧」にみられる教科書のうち、国立教育政策研究所教育図書館で閲覧可能だった計45種を分析対象とした。資料に用いた明治期13種、大正期17種、昭和戦前期15種を表1に示す。また、家庭科教科書は、戦後から現在まで、継続して出版されているものを採用した。高等学校は実教出版、中学校は開隆堂から発行された教科書である。小学校においては、平成元年告示の学習指導要領まで、「簡単な間食を整え、食べ方や進め方を工夫し、団らんを楽しめるようにすることが出来るようにする。」という内容が含まれていたが、「保育」の領域ではないので、「幼児食」における間食・おやつ・菓子の位置づけを明らかにする今回の研究目的とは一致しないため、分析の対象からは除外した。資料として用いた中学校家庭科教科書を表2に、高等学校家庭科教科書を表3に示した。高等学校家庭科教科書は、同時に2種の教科書が出版されていることもあり、編著者によって内容の特徴が異なるので、編著者ごとに示している。

(2) 分析方法

分析資料の「保育」の領域の食生活に関する記述から「間食・おやつ・菓子」に関する内容を抽出した。該当する記述は、「離乳食」と「幼児食」の箇所であり、「間食・おやつ・菓子」がどのように位置づけられているのかを分析した。具体的には、①間食・おやつ・菓子についての注意事項、②間食・おやつ・菓子の機能、③市販の菓子が提示されているか、④手作りのおやつが提唱され、献立例、作り方が示されているかを中心に分析した。

3. 研究結果と考察

(1) 高等女学校家事科検定教科書の分析結果と考察

家事科教科書における間食・おやつ・菓子に

表1 分析対象とした高等女学校家事科検定教科書

| 資料番号 | 発行年 明治(西暦)年 | 著 者 | 書 名 | 巻冊 | 発行者 |
|------|----------------|---------------|---------------|----|-------------|
| M 1 | 31(1898) | 後閑菊野・佐方鎮 | 家事教科書 | 2冊 | 河出静一郎・目黒甚七 |
| M 2 | 33(1900) | 塚本はま子 | 家事教本 | 1冊 | 金港堂書籍 |
| M 3 | 35(1902) | 喜多仁史・村田修 | 家政教本 | 1冊 | 普及社 |
| M 4 | 36(1903) | 児崎隆子 | 新撰家事教科書 | 2冊 | 大葉久吉・吉岡平助 |
| M 5 | 39(1906) | 星常子・中島よし子 | 再訂家事教程 | 2冊 | 合資会社六盟館 |
| M 6 | 41(1908) | 戸野みちえ | 最新家事教科書 | 2冊 | 大葉久吉・吉岡平助 |
| M 7 | 42(1909) | 教育学術研究会 | 高等女学家事教科書 | 2冊 | 森山章之丞 |
| M 8 | 42(1909) | 甫守ふみ | 実用家事教科書 | 2冊 | 岩田遷太郎 |
| M 9 | 43(1910) | 後閑菊野・佐方鎮 | 修訂家事提要 | 1冊 | 河出静一郎・目黒甚七 |
| M10 | 45(1912) | 中島よし子 | 新編家事教科書 | 2冊 | 杉本光治 |
| M11 | 45(1912) | 星常子・中島よし子 | 近世家事定本 | 2冊 | 合資会社六盟館 |
| M12 | 45(1912) | 後閑菊野・佐方鎮 | 実家高等女学校用家事教科書 | 2冊 | 河出静一郎・目黒甚七 |
| M13 | 45(1912) | 家事研究会 | 実用家事教科書 | 2冊 | 瀬川光行 |
| T 1 | 大正 2 (1913) | 戸野みちえ | 家事新教科書 | 2冊 | 大葉久吉 |
| T 2 | 大正 2 (1913) | 竹島茂郎 | 女学校用家事教科書 | 2冊 | 渡辺滋 |
| T 3 | 大正 2 (1913) | 塚本はま | 新撰家事教本 | 2冊 | 金港堂書籍株式会社 |
| T 4 | 大正 2 (1913) | 吉村千鶴 | 新定教科家事教本 | 2冊 | 西野虎吉 |
| T 5 | 大正 3 (1914) | 佐々木君代 | 最新家事教科書 | 2冊 | 大日本図書株式会社 |
| T 6 | 大正 3 (1914) | 吉村千鶴 | 実地応用家事教科書 | 2冊 | 西野虎吉 |
| T 7 | 大正 4 (1915) | 美島近一郎 | 実用家事教科書 | 2冊 | 株式会社啓成社 |
| T 8 | 大正 6 (1917) | 石沢吉麿 | 家事新教科書 | 2冊 | 石井清 |
| T 9 | 大正 6 (1917) | 開成館編集所 | 大正家事教科書 | 2冊 | 西野虎吉 |
| T10 | 大正 7 (1918) | 大江スミ | 応用家事教科書 | 2冊 | 大葉久吉 |
| T11 | 大正 9 (1920) | 後閑菊野・佐方鎮 | 近世家事教科書 | 2冊 | 河出静一郎・目黒甚七 |
| T12 | 大正 9 (1920) | 戸野みちえ | 新定家事教科書 | 2冊 | 大葉久吉 |
| T13 | 大正13(1924) | 家庭経済研究会 | 家事教科書 | 2冊 | 外松荒三 |
| T14 | 大正14(1925) | 東京開成館編集所 | 現代家事教科書 | 2冊 | 株式会社東京開成館 |
| T15 | 大正14(1925) | 井上秀子 | 現代家事教科書 | 2冊 | 合資会社文光社 |
| T16 | 大正15(1926) | 大日本図書株式会社 | 最新家事教科書 | 2冊 | 大日本図書株式会社 |
| T17 | 大正15(1926) | 家事科資料研究会 | 総合家事教科書 | 2冊 | 株式会社文献書院 |
| S 1 | 昭和 2 (1927) | 西野みよし | 家事新編 | 2冊 | 合資会社文光社 |
| S 2 | 昭和 2 (1927) | 近藤耕蔵 | 新編家事教科書 | 2冊 | 上原才一郎 |
| S 3 | 昭和 3 (1928) | 竹島茂郎 | 新編家事教科書 | 2冊 | 目黒甚七 |
| S 4 | 昭和 3 (1928) | 倉橋惣三他 | 最新家事 | 2冊 | 合資会社富山房 |
| S 5 | 昭和 3 (1928) | 越智キヨ | 新時代家事教本 | 2冊 | 星野敬一 |
| S 6 | 昭和 5 (1930) | 家事教授研究会 | 昭和家事教本 | 2冊 | 合資会社文光社 |
| S 7 | 昭和 6 (1931) | 奈良女子高等師範学校佐保会 | 中等教育家事新教科書 | 2冊 | 加島幸 |
| S 8 | 昭和 8 (1933) | 三省堂編集所 | 昭和家事教科書 | 2冊 | 株式会社三省堂 |
| S 9 | 昭和 9 (1934) | 甫守ふみ | 実用家事 | 2冊 | 岩田 太郎 |
| S10 | 昭和10(1935) | 西田博太郎他 | 実践家事新教本 | 2冊 | 株式会社東京開成館 |
| S11 | 昭和12(1937) | 井上秀子 | 簡明中等家事 | 2冊 | 合資会社文光社 |
| S12 | 昭和13(1938) | 倉橋惣三他 | 新撰家事教科書 | 2冊 | 合資会社富山房 |
| S13 | 昭和14(1939) | 山崎厚三・有本邦太郎 | 新日本家事教科書 | 2冊 | 林澄 |
| S14 | 昭和15(1940) | 山崎厚三他 | 実践家事提要 | 2冊 | 林澄 |
| S15 | 昭和18(1943) | 中等学校教科書株式会社 | 家事一 | 1冊 | 中等学校教科書株式会社 |

表2 分析対象とした中学校家庭科教科書（開隆堂）

| 資料番号 | 出版年 | 書名 | 学習指導要領 |
|------|--------|------------------------|-----------------|
| 中1 | 1952 | 生活の喜び（家庭生活） | 1951年発行 |
| 中2 | 1954 | 新版 生活の喜び（家庭生活） | |
| 中3 | 1956 | 中学職業・家庭 家庭生活 | |
| 中4 | 1957 | 新版 中学職業・家庭 第5群を中心としたもの | 1956年発行・1957年実施 |
| 中5 | 1959 | 新編 中学職業・家庭 第5群を中心としたもの | |
| 中6 | 1966 | 改訂 中学家庭（一冊） | 1958年告示1966年施行 |
| 中7 | 1966 | 技術・家庭（女子用）1・2・3 | |
| 中8 | 1969 | 同上 | |
| 中9 | 1972 | 同上 | 1969年告示1972年施行 |
| 中10 | 1975 | 同上 | |
| 中11 | 1978 | 技術・家庭（女子向き）1・2・3 | 1977年告示1981年施行 |
| 中12 | 1981 | 技術・家庭 家庭分野 上・下 | |
| 中13 | 1984 | 同上 | |
| 中14 | 1987 | 同上 | |
| 中15 | 1990 | 同上 | |
| 中16 | 1993 | 同上 | 1989年告示1993年施行 |
| 中17 | 1997 | 同上 | |
| 中18 | 2002 | 技術・家庭 家庭分野 | 1998年告示2002年施行 |
| 中19 | 2005 | 同上 | |
| 中20 | 2011検定 | 同上 | 2008年告示2012年施行 |

表3 分析対象とした高校家庭科教科書（実教出版）

| 編著者 | 資料番号 | 出版年 | 教科書名 | 学習指導要領 |
|------------------|------|--------|-------------------------|----------------|
| 日本女子大学 家庭科研究会 | 高1 | 1952～4 | 一般家庭「家族」「衛生と看護」「住まい」改訂版 | 1948年発行1949年実施 |
| | 高2 | 1956 | 高校家庭「家族Ⅰ」「衛生と看護」「住まい」 | 1955年発行1956年実施 |
| | 高3 | 1957 | 高校家庭一般 | 同上 |
| | 高4 | 1960 | 家庭一般 | 同上 |
| | 高5 | 1971 | 家庭一般 | 1960年告示1963年施行 |
| 奈良女子大学 家政学会 | 高6 | 1968 | 新編家庭一般 | 1960年告示1963年施行 |
| | 高7 | 1973 | 新編家庭一般 | 1970年告示1973年施行 |
| 高校家庭科 学習研究会 | 高8 | 1973 | 高校家庭一般 | 1970年告示1973年施行 |
| | 高9 | 1976 | 高校家庭一般 改訂版 | 同上 |
| | 高10 | 1979 | 高校家庭一般 三訂版 | 同上 |
| | 高11 | 1982 | 高校家庭一般 | 1978年告示1982年施行 |
| | 高12 | 1985 | 高校家庭一般 改訂版 | 同上 |
| | 高13 | 1988 | 高校家庭一般 三訂版 | 同上 |
| | 高14 | 1991 | 高校家庭一般 四訂版 | 同上 |
| 岩崎芳枝ほか | 高15 | 1985 | 新家庭一般 | 1978年告示1982年施行 |
| | 高16 | 1991 | 新家庭一般 改訂版 | 同上 |
| | 高17 | 1988 | 新版家庭一般 | 同上 |
| | 高18 | 1991 | 新版家庭一般 改訂版 | 同上 |
| 伊藤セツほか | 高19 | 1993 | 家庭一般 | 1978年告示1982年施行 |
| | 高20 | 1998 | 家庭一般 新訂版 | 1989年告示1994年施行 |
| 春日寛ほか | 高21 | 1999 | 家庭一般21 | 1989年告示1994年施行 |
| | 高22 | 2003 | 家庭総合21 | 1999年告示2003年施行 |
| | 高23 | 2007 | 新家庭総合21 | 同上 |
| 宮本みち子ほか | 高24 | 2003 | 家庭総合 | 1999年告示2003年施行 |

関する記述を表4に示した。家事科教科書は、下巻の「保育」領域に、離乳食とおやつ項目が「離乳後の食物」として同時に述べられているものがほとんどであった。一部の教科書は、上巻の「食物」領域の食品を説明する項目の一つに「菓子」が含まれていた(資料番号M3、M8、T9、以下カッコ内「資料番号」のみを記す)。間食・おやつ・菓子についての語りを出来る限りそのまま抜粋している。

教科書検定初期の明治30年代は、砂糖は消化に悪い、また、来客時に砂糖を多用した菓子を出してはいけないといったような記述(M8)がみられ、間食にも否定的である。「間食の悪癖」(M2)といった表現が見られた。幼児食に関しても、「菓子類などは避くべきなり」(M3)、「濫りに間食するはよろしからず」(M5)など、菓子・間食を禁ずる記述が多い。明治40(1907)年をすぎると、幼児は多くの食物を摂取する必要があるため、一日1・2回の間食は栄養的に必要との記述がみえ始める(M7)。

大正3(1914)年には、「菓子類にては、軽焼・風船あられ・ビスケット・ポーロ・パン・カステラ・葛餅・瓦煎餅等はよろし」(T5)と、具体的な市販の菓子の名が挙げられるようになる。大正期の高等女学校への進学者は10%から20%であり、社会階級の高い家庭の子女を教育の対象としていた。これらの菓子はいわば一般庶民にとってはぜいたく品だったことが考えられる。また、「朝と昼の間及び昼と夕の間に一度宛間食を許すこととし、学校に通ふころに至りても、なほ暫く帰宅後に所謂「おやつ」なるものを与ふるを宜しとなす」(T2)という記述もみられ、このころに、子どもに与える間食の菓子を「おやつ」と呼ぶ習慣が始まったことがわかる。さらに、「菓子類は(中略)嗜好食品にして娯楽の趣味あるを特徴とす」(T9)という表現がみられ、明治期には禁じた砂糖を用いた「菓子」の「おいしく食べて満足する」という心理的機能が謳われるようになり、生きるためだけでなく、「食を楽しむ」文化が、近代化した日本にも普及されつつあったことがうかがえる。

昭和3(1928)年発行の教科書に「午前十時、午後三時に間食としてお握り・蒸甘藷等与へ」(S5)という記述がみられた。大正期から昭和の初めにかけては、前述のような具体的な市販の菓子の名称が挙げられているものが多く、菓子以外の記述は珍しい。また、「すべて菓子は味良く疲労を回復し精力を増すに効があるけれども」(S9)との記述がみられ、明治期では「砂糖は消化しにくく胃腸に悪い」といわれていたものが、糖分のもつ効果について語られるようになる。大正9(1920)年には栄養学研究所が設立され、女子高等師範学校などでも食物学の科学研究が始まっている。昭和に入ると教科書の内容も科学的 content が増える傾向にある。間食についての記述も「間食は主食の不足を補ふのが本旨であるから、適量に与えること」(S11)とし、栄養素の説明をするなど、具体的な食品を示すのではなく、栄養や与え方の注意事項を示すようになった。

(2) 高等学校・中学校家庭科教科書の分析結果

表5に中学校家庭科教科書における間食・おやつ・菓子に関する記述の調査結果を示している。中学校技術・家庭の家庭分野の学習指導要領の「保育」には、平成元(1989)年告示のものまで「幼児の食生活について考え、簡単な間食を作ることが出来る」(平成元年告示学習指導要領)といった間食についての内容が具体的に明記されていた。したがって、1966年出版の教科書からは「おやつ」の項目が設けられている。離乳食に関する言及は少なく、おやつや菓子についての言及はなかったため、「おやつ」の項の記述を分析した。おやつ項には、間食の役割、間食を作る、幼児に与えることにもなう注意事項、献立例、及びおやつ作り方が示されていた。すべての教科書に、幼児は一度に食べる量が少ないことから栄養補給のため間食が必要であること、時間を決めて、午前と午後2回適量の間食を与えることが述べられていた。したがって、項目名、栄養補給以外の間食の機能、間食の時間・回数・量以外の注意事項について表に示している。

項目名は、初めは「おやつ」のみだったもの

表4 家事科教科書における間食・おやつ・菓子に関する記述

| 資料 番号 | 発行年 明治(西暦)年 | 「離乳後の食物」における間食・おやつ・菓子に関する記述 | 頁 |
|----------|----------------|------------------------------------------------------------------------------------|----------|
| M1 | 31(1898) | 菓子類は淡泊なるものを選ぶべし | 下33 |
| M2 | 33(1900) | 乳汁の外の食物(中略)ビスケット等 間食の悪癖 | 下220 |
| M3 | 35(1902) | 菓子類避くべき(食品項目)菓子類は(砂糖を多用しているので)消化器を損ず | 68・86 |
| M4 | 36(1903) | 甘い菓子類決して与ふべからず(食品項目「菓子類」) | 下40・41 |
| M5 | 39(1906) | 濫りに間食するはよろしからず | 下32 |
| M6 | 41(1908) | 時を定めずして与ふるは決して不可 | 下39 |
| M7 | 42(1909) | 午前午後の二回 絶えず与ふるは有害 | 下48 |
| M8 | 42(1909) | 十時頃と午後三時頃に軽き菓子(食品項目「菓子」) 来客あれば多くこれ(砂糖を多用した菓子)を饗することは好ましき風習にあらざる | 下113・上21 |
| M9 | 43(1910) | 間食は一二回の外は与へざるを可とす | 101 |
| M10 | 45(1912) | 菓子にては軽焼・水飴・ビスケット等を与ふべし(離乳期) あしき菓子類はよろしからず(離乳後) | 下20・21 |
| M11 | 45(1912) | 濫りに間食するはよろしからず | 下33 |
| M12 | 45(1912) | 菓子類は淡泊なるものを選ぶべし | 下80 |
| M13 | 45(1912) | 菓子としては満一年頃よりビスケット・ボール・軽焼・ウェファース・水飴等 | 下97 |
| T1 | 大正2(1913) | 間食としては午後三時ごろに一度 | 下119 |
| T2 | 大正2(1913) | 朝と昼の間及び昼と有との間に打つち宛間食を許すこととし、学校に通ふ頃に至りてもなほ暫くは帰宅後に所謂おやつなるものを与ふるを宜しとなす | 下48 |
| T3 | 大正2(1913) | 間食の悪癖はこの時期より予防し | 下38 |
| T4 | 大正2(1913) | 菓子類は淡泊 | 下89 |
| T5 | 大正3(1914) | 菓子類にては軽焼・風船あられ。ビスケット・ボール・パン・カステラ・瓦煎せんべい、餅菓子・蒸菓子は少量、チョコレート・金平糖等はなるべく避く | 下36 |
| T6 | 大正3(1914) | (間食・おやつ・菓子の記述なし) | |
| T7 | 大正4(1915) | (間食・おやつ・菓子の記述なし) | |
| T8 | 大正6(1917) | 菓子は1ヶ年ころより、カステラ・ビスケット・ポーロのごとき柔らかにして口にて砕けやすく且溶けやすきもの | 下92 |
| T9 | 大正6(1917) | 二回の間食(食品項目「菓子類」)嗜好食品にて娯楽の趣味あるを特徴とす 栄養上有利にして(中略)健康保持に資する | 下24・上13 |
| T10 | 大正7(1918) | 糖分多く又は油多き菓子類は避け、少量の果実・甘藷・ビスケット・煎餅・飴等を選ぶべし | 下111 |
| T11 | 大正9(1920) | 間食は時を定めて一二回与ふるも妨げなければども | 下81 |
| T12 | 大正9(1920) | 菓子類は強いて与へるには及ばないが、ごく軽くて甘みの少ないもの、例えば水飴・ある焼・ウェファー・ボール・ビスケット | 下146 |
| T13 | 大正13(1924) | 一二回の間食を与えてよい | 下27 |
| T14 | 大正14(1925) | 軽焼・ウェファース・ポーロ・カステラなどのやうな、甘みの少ない菓子類をも与えてよい | 下93 |
| T15 | 大正14(1925) | おやつには、ウェファース・ビスケット類の菓子類、煮た果実等を少しづつ(離乳期)菓子類はウェファース・カルヤキ・ビスケット・カステラ等(離乳後) | 下112・113 |
| T16 | 大正15(1926) | 折々ビスケット・カステラ・煎餅・飴等与へる | 下122 |
| T17 | 大正15(1926) | (間食・おやつ・菓子の記述なし) | |
| S1 | 昭和2(1927) | (4)菓子類は軽焼ウェファース・ポーロ・カステラ等の如き甘味強からざるものを選ぶべし | 下127・128 |
| S2 | 昭和2(1927) | 消化易き菓子 | 下99 |
| S3 | 昭和3(1928) | 朝と昼の間及び昼と有との間に打つち宛間食を許すこととし、学校に通ふ頃に至りてもなほ暫くは帰宅後に所謂おやつなるものを与ふるを宜しとなす | 下41 |
| S4 | 昭和3(1928) | 菓子七八ヶ年頃からカルルス煎餅・ウェファース・ポーロ等与へ、一年後にはビスケット・煎餅類などもよい | 下72・73 |
| S5 | 昭和3(1928) | 子どもには三度の食事の外に午前十時午後三時に間食としてお握り蒸甘藷等与へ | 下137 |
| S6 | 昭和5(1930) | (間食・おやつ・菓子の記述なし) | |
| S7 | 昭和6(1931) | 離乳期の食物：プディング 四五歳になったら午前午後二回の間食与へ、学齢後は午後だけの間食 間食は軽い消化のよいもの | 下106・108 |
| S8 | 昭和8(1933) | (離乳期)菓子はカルヤキ・ボール・ウェファー等のるいよりカステラ・煎餅・上等のビスケット等に進む 間食は却って望ましい ビスケット少量 買い食いの習慣は絶対に避ける | 下97・100 |
| S9 | 昭和9(1934) | (間食・おやつ・菓子の記述なし)(食品項目「菓子」)すべて菓子は味良く疲労を回復し精力を増すに効がある | 上118・119 |
| S10 | 昭和10(1935) | 一二回の間食与へてよい | 下143 |
| S11 | 昭和12(1937) | 間食は(中略)適量与へること 消化しやすく(中略)、満腹感感じさせる(中略)水分に富むもの | 下82 |
| S12 | 昭和13(1938) | 間食を午前午後の2回ぐらい与へて栄養を補ふ | 下100 |
| S13 | 昭和14(1939) | 準備期に於てビスケットまたはカルケットの如き精製セル小麦粉を原料とする菓子類与へ初め一個一回より二個二回とする | 下114 |
| S14 | 昭和15(1940) | 準備期に於てビスケットまたはカルケットの如き精製セル小麦粉を原料とする菓子類与へ初め一個一回より二個二回とする | 下101 |
| S15 | 昭和18(1943) | (間食・おやつ・菓子の記述なし) | |

表5 中学校家庭科教科書における間食・おやつ・菓子に関する記述

| 資料番号 | 出版年 | 項目名 | 間食の栄養補給 以外の機能 | 間食の時間・回数・量 以外の注意事項 | 献立 例 | 作り 方 |
|--------|---------|-----------------------------------|------------------|----------------------------------|---------|---------|
| 中6 | 1966 | 幼児の栄養 (228) | | 遊び食い・買い食い禁止 | | |
| 中7・8 | 1966・69 | おやつ (3:170~172) | | 甘い菓子は食欲減退・菌に悪い | 4例 | |
| 中9・10 | 1972・75 | おやつ (3:173~175) | | 甘い菓子は食欲減退・菌に悪い | 2例 | 2例 |
| 中11 | 1978 | おやつ (3:140~142) | | 砂糖多用した菓子菌に悪く偏食・ 食欲不振 | 2例 | 2例 |
| 中12・13 | 1981・84 | 食事・おやつの与え方 (165~167) | | 自然に近い食品 人工甘味料・着 色料控える | 1例 | 1例 |
| 中14・15 | 1987・90 | 食事やおやつはどのように与えたら よいか (187~189) | | 調理・盛り付け・雰囲気・マナー 精神的満足 | 4例 | 1例 |
| 中16 | 1993 | おやつの与え方について考えよう (157~158) | 休息・気分転換 | 幼児が喜ぶ食器・盛り付け 水分 補給 手作りのもの安心 | 6例 | 2例 |
| 中17 | 1997 | 幼児のおやつについて考えよう (177~178) | 休息・気分転換 | 市販品は日付・品質表示に注意、 衛生、安全、菌ごたえ、水分 | 2例 | 2例 |
| 中18 | 2002 | おやつをつくろう (188~189) | 休息・気分転換 | 市販品は日付・品質表示に注意、 衛生、安全、菌ごたえ、水分 | 5例 | 2例 |
| 中19 | 2005 | おやつをつくろう (167) | 休息・気分転換 | 市販品は日付・品質表示に注意、 衛生、安全、菌ごたえ、水分 | 4例 | 2例 |
| 中20 | 2011検定 | お菓子をつくろう (36・132~133) | 食に色どり・会話 | | | 5例 |

*中1～5には「おやつ」「幼児食」の項目ない。離乳食に「菓子類」が含まれ、「菓子はビスケット・ポーロ・かるやきせんべい・カステラなど、プディング・ゼリーなどをおやつに用いる」とある。

*カッコ内の数字は頁数、複数の教科書の場合は年度の早いものの該当頁を示す。

が、「与え方」が加わり、その後「考えよう」となっている。平成10(1998)年告示の学習指導要領以降、「間食」の内容はなくなったが、教科書には「おやつをつくろう」として内容が残されている。2011年に検定された教科書には「おやつ」の項目はなくなったが、幼児食のコラムに「幼児は胃が小さいのでおやつは食事の一部として重要です」との記述がみられ、菓子作りの参照ページが示されている。間食の栄養補給以外の機能に関しては、1993年(中16)から「休息や気分転換」という文言が加えられるようになり、2011年検定の教科書は、食物分野の菓子作りのページに「おやつは食生活にいろいろを添え、いっしょに食べる人との会話もはずませます。おやつをつくることができると、自信が深まり、他の調理にも挑戦してみようと思うようになります」(中20)とある。間食に関する注意事項は、1966年は「買い食い」について(中6)、その後、1978年までは砂糖の弊害(中7~11)について言及している。1980年代前半は、食品の工業化が進み加工食品が普及、人工甘味料や着色料による健康被害への警鐘が高まった社会的背景を反映して、「自然に近い

食品」という文言が登場する(中12・13)。1980年代後半に食事の雰囲気や精神的満足についての記述がみられるのは、1980年代の前半に「子どもの孤食」に対しにわかに社会的注目が集まった影響と考えられる(中14・15)。1993年には「手作りのものは安心して与えられる」と手作りが提唱され(中16)、その後「手作り」の文言は含まれないものの、市販品を与える場合の注意事項が示されている(中17~19)。献立例は1例から5例が示されている。1978年までは幼児食の1部に間食の例が示されていた。1993年からは水分補給の重要性にも言及されるようになり、飲み物の例が加わっている。作り方は具体的にはカスタードプディング、ロッキングケーキなどが多く、2005年までは大きな変化はないが、2011年検定の教科書ではページ数が増えて写真の見栄えも美しくなっている。改訂前より倍以上も多い5つのおやつの作り方が紹介されている(中20)。

表6に高等学校家庭科教科書における間食・おやつ・菓子に関する記述の調査結果を示している。離乳食に関する項目、幼児食に関する項目について各々調査した結果を示した。離乳食

表 6 高等学校家庭科教科書における間食・おやつ・菓子に関する記述

| 資料番号 | 出版年 | 離乳食 | 幼児食間食の栄養補給以外の機能 | 間食の時間・回数・量以外の注意事項 | 献立例 | 作り方 |
|--------|---------|-----------------------------|-----------------|---------------------------------------------------------------------------|-----|-----|
| 高4 | 1960 | 菓子類 ポーロ・ウェファース・ビスケット (77) | 項目なし | | | |
| 高5 | 1971 | | 休養・気分転換 | 買い食いのくせをつけることはしつけの上からもよくない (229) | 3例 | |
| 高6・7 | 1968・73 | 菓子類 ウェファース・ビスケット・カステラ (181) | | | 6例 | |
| 高8～14 | 1973～91 | | | 消化の良い軽いもの (15) | 3例 | |
| 高15・16 | 1985・91 | (ベビーフード常用避けたい) (172) | 楽しみ | 手作りのものが望ましい 市販品は塩分・添加物の点から注意 (173) | | |
| 高17・18 | 1988 | (ベビーフード常用避けたい) (169) | | 市販品は塩分・添加物の点から注意 甘いものの次の食事・虫菌に影響 (160) | | |
| 高19 | 1993 | | | | | 2例 |
| 高20 | 1998 | | | | | |
| 高21 | 1999 | | | おやつ—甘味の強い菓子やジュース類を避けビスケットやせんべいなど (60) | | |
| 高22 | 2003 | | 楽しみ | 手作りのもの (46) | | |
| 高23 | 2007 | | 楽しみ | 栄養価が高く消化の良い手作りのもの (49) | 1例 | |
| 高24 | 2003 | | | コラム子どもの食習慣と健康：インスタント食品や加工食品に頼る食生活 間食にも袋菓子や板チョコチョコレート ケース 粗食の過食 肥満の原因 (56) | | |

*カッコ内の数字は頁数、複数の教科書の場合は年度の早いものの該当頁を示す。

*高1～3には離乳食・幼児食の項目がない。高15～18にはショートケーキ、アイスクリーム、乳酸飲料、キャラメル、チョコレートの砂糖量を示すグラフが掲載されている。

の説明には、1960年代の3種の教科書に、いくつか（炭水化物、魚類、乳製品など）の食品の一つとして「菓子類」があげられ、表に示したような菓子が並べられている（高4・6・7）。大正3（1914）年に始まった離乳食に用いる市販の菓子類の提示の流れをくむものであるが、1970年代後半以降は示されなくなった。栄養補給以外の機能は、多くは言及されていないが、1971年は1993年以降の中学校教科書と同様の「休養・気分転換」（高5）、また、「楽しみ」との文言が4種の教科書にみられた（高15・16・22・23）。間食を与える際の注意事項に関しては、1971年の教科書には、1966年発行の中学校教科書と同様に、「買い食い」の禁止が語られている（高5）。1985年発行の教科書には、手作りのものが望ましく、市販品は問題があるので与える場合注意が必要との記述が現れる（高15）。その後「手作り」が明記されている教科書は3種（16・22・23）、1990年代の2種の教科書（高19・20）以外は市販品を用いることへの警鐘が含まれていた。とくに1980年代は市販

の菓子類の粗糖量を示すグラフが掲載されている（高15～17）。また、2003年発行の教科書の「子どもの食習慣と健康」と題したコラムのなかでは、間食に袋菓子や板チョコレートを与えることを「粗食の過食」とし、肥満の原因になると述べている（高24）。

(3) 家事科教科書、家庭科教科書における間食・おやつ・菓子に関する内容の変遷

以上、家事科教科書、家庭科教科書における間食・おやつ・菓子に関する記述は、時代的背景を反映していることがわかった。戦前期の間食は、日常的にはお握りや蒸甘藷といったものだったと考えられる。大正期に普及したカステラやビスケット、あられ、昭和にかけてキャラメル、チョコレートなど市販の菓子類は、一般庶民にとっては高級品だった。比較的裕福な子女を対象に教育とした大正・昭和前期の家事科教科書においては、そのような市販の菓子類（ビスケット、ポーロ、煎餅、カステラなど）を離乳食に用いることを提唱し、1970年代前半までこの傾向が続いていた。

一方、食品工業が発達して市販の菓子が多く販売されるようになり、さまざまないわゆる「スナック菓子」が普及する1980年代以降は、市販品を用いる弊害への警鐘が盛んに行われ、同時に手作りのよさが提唱されるようになる。中学校教科書においては、間食作りが学習指導要領の内容に含まれなくなった2002年以降の教科書の方が、かえって手作り志向が高まる傾向にあることが、項目名や2011年検定教科書のレシピのページから判断できる。2000年以降にはバレンタインデーの手作りチョコブームが起きるなど、社会一般にも手作り菓子を礼賛する風潮が続いている（吉田2010）。教科書には、手作りが当たり前だった時代のお握りや蒸甘藷など、手作りが容易なものが作り方としてあげられるのではなく、手間のかかる洋菓子が多くとりあげられている。高等学校教科書もまた、1980年以降に手作りおやつやの奨励が多くなされていることは上述の通りである。表7にカッコ書きで示したように、1980年代の4種の教科書は（高15～18）は、市販のベビーフードを離乳食に用いることも避けるよう言及している。

家庭科は、「家事は母がすべきもの」というジェンダーバイアスを教えてきた過去をもつことは否めない（表2006）。しかし、1994年に小・中・高等学校一貫した男女共修が実現した後には、女性だけでなく、男性もおやつを手作りするような教育が行われてきたはずである。しかし、現実に子どもを育て、子どもの食を支えているのは母親である。授業を受けている生徒のなかにも、「子育ては母がするもの」と思っているものが少なくないだろう。子育てにおける男女共同参画に関する十分な教育なしに、おやつや離乳食の手作りを提唱することは、冒頭にも述べたように、母親を追い詰めることになりかねない。ラプトンは「女性が多くの家事に加えて食事の準備もしなければならなかった結果、社会参加が阻まれてきた」と述べている（Lup T on, 1996）。欧米諸国と比較して母親の就業率が低いことは、母として毎日の食をととのえなければならないという母親自身の強迫観念が一端を担っており、それが世界における

日本の女性の地位の低さにつながっているといても過言ではない。家庭科は、ジェンダーの再生産がないよう、十分な配慮の上で、食に関する教育を行っていく必要があるだろう。

3. まとめと今後の課題

家庭科教育において、幼児食の一つである間食・おやつ・菓子がどのように位置づけられ、教えられてきたのかを明らかにし、今後の教育の方向性を探ることを目的として、1898年から1943年に発行された高等女学校家事科検定教科書45種、中学校家庭科教科書20種、高等学校家庭科教科書24種の計89種を分析資料とし、「離乳食」と「幼児食」の項目内容に、「間食・おやつ・菓子」がどのように位置づけられているのかを分析した。その結果以下の4点が明らかになった。

- ①教科書検定初期の明治30年代は、砂糖は消化に悪い、また、来客時に砂糖を多用した菓子を出してはいけないといったような記述がみられ、間食にも否定的である。
- ②大正にはいると、軽焼・風船あられ・ビスケット・ボーロ・パン・カステラ・葛餅・瓦煎餅等、離乳食に市販の菓子があげられるようになり、この傾向が1970年代前半まで続く。また、間食は幼児に必要なものとして位置づけられるようになり、昭和期には間食の栄養に関する専門的な内容も含まれるようになる。
- ③中学校教科書では、学習指導要領に従って、1970年以降一貫して間食の作り方が示されている。1990年以降は手作りおやつやの提唱、市販の菓子類を用いることへの注意がなされ、2011年検定の教科書では、おやつやの作り方が増加している。
- ④高等学校教科書では、1980年代後半以降、中学校教科書と同様、手作りの提唱、市販の菓子類への警鐘が行われ、2000年以降はその傾向が高まっている。

今後は、間食に関する授業実践例の調査、さらにはベビーフードの扱いについても研究を進めたい。

文 献

- 青木直己 (2004) おやつ由来. 食の文化誌ヴェスタ. 56, 2-7
- ベネッセ教育研究開発センター (2008) 第3回子育て生活基本調査 (幼児版)
- 原田春美・小西美智子・寺岡佐和 (2011) 子育て不安の実態と保健師の支援の課題. 人間と科学11(1), 53-62
- 林丈二 (2004) 明治の「間食」あれこれ. 食の文化誌ヴェスタ. 56, 12-13
- Lupton.D (1996). FOOD, THE BODY AND THE SELF 1ST Edition. 無藤隆・佐藤恵理子 (訳) (1999) 食べることの社会学〈食・身体・自己〉. 新曜社
- 町田忍 (2004) 戦後おやつ発展史. 食の文化誌ヴェスタ. 56, 14-17
- 長尾健二 (2002) 日本の洋菓子, その歴史と健康志向. 食の科学. 290, 22-27
- 内閣府 (2004) 男女共同参画社会に関する世論調査
- 大日向雅美 (2009) 離乳食で保護者を追い詰めないために—指導ではなくエンカレッジ—. 食生活. 103 (12), 56-59
- 表真美 (2006) 家庭科が教えてきた「食卓での家族団らん」—戦後教科書から—. 京都女子大学発達教育学部紀要. 2, 43-49
- 表真美ほか (2009) (社) 日本家政学会関西支部 31回 (通産87回) 研究発表会発表要旨集
- 総務省統計局 (2006) 社会生活基本調査
- 藪光生 (2002) おやつと和菓子. 食の科学. 290, 8-13
- 吉田菊次郎 (2010) 平成親し事情—スイーツ・トレンド1990—. 食文化誌ヴェスタ. 80, 38-43